なんもく 山村ぐらし通信

※先月発刊予定の「山村ぐらし通信第3号」は、編集作業の不都合により誠に勝手ながら一ヵ月の発刊延期とさせていただきました。内容に経過した時間差を感じる表現もございますがご理解を頂けますようお願いいたします。
（編集スタッフ一同）

秋も深まりつつある11月。予定から2ヶ月遅れとなってしまった「体験型民家」の運用が、各方面の協力の下、先月29日の開所式をもって正式にスタートとなりました。

「体験型民家」の運用開始！

先月、10月29日（月）に行なわれた体験民家開所式をもって正式に運用を開始した「なんもく暮らし体験民家」。事業に関わってきた役場・企画情報課、山村ぐらし支援協議会双方にとってまだまだ手探り状態でのスタートとなりましたが、今後運用するに当たって様々な課題や改善すべき点が見えてくることと思いますので、都度、より良い方向に改善し利用者と村との繋がりのきっかけになれるような役割を果たしてゆけることを期待しています。

このところ何度となく各メディアに取り上げていただいたこともあり、良くも悪くも受ける反響は大きく、窓口となる役場には見当違いな問合せも殺到。広報の仕方、説明の分かり易さ、規約等の早急な改定と見直しが必要なようです。

ようやく動き出した「なんもく暮らし体験民家」。その開所式では協議会メンバーの信濃屋・金田さんより記念の手作り和菓子「鳥の子餅」が配られるサプライズもあり、その心遣いに遅まきながら感謝！そして表には出てこないながら様々なかたちで協力・支援を頂いた多くの方々に感謝いたします。繰り返しになりますが、ようやくスタートしたばかりの事業。これから一人でも多くの利用者がなんもく村に興味を持っていただけるような運用が出来るよう村民皆様のさらなるご理解をよろしくお願いいたします。～和菓子を貰い損ねた編集スタッフ～

お祝いに配られた薄紅色の「鳥の子餅」

2012（平成24）年12月号
通巻第3号版（秋季号）

発行責任者：石井　悟
問合せ　南牧村役場
企画情報課
電話　0274-87-2011（代表）

紙面編集：神戸　広
発行元：南牧山村ぐらし
支援協議会
代表者：石井　裕幸

気が付きました？大きな看板

暑かった今年の夏もようやく終わり、朝晩の空気も涼しくなってきました。これからは「寒い～！」と言いたくなる季節がやってきますね。

県道45号線沿い休養村センター敷地の看板を見ていただけましたか？9／17に山村ぐらし支援協議会、明日の南牧を創る会による看板設置作業が行われました。思わず写真を撮りたくなるような看板でしょ？そこに描かれているのが村の公式マスコット「なんしいちゃん」。まだまだぐんまちゃんほど有名ではないけれど南牧の良さを宣伝しようと生まれてきました。名前の由来は未来を担う南牧村の子どもたち「南子（なんしい）」。どこの家でも我が子が生まれる前から名前を考え、生まれた子と対面してまた考え、この子の将来がすばらしいものであることを願い名前をつけますよね。この子も同じように、生まれてから家族全員で名前を考えあぐねないこうでもないとバトルを繰り返し、最終的に「なんしいちゃん」に決まったそうです。前髪は「三段の滝」「象ヶ滝」「線ヶ滝」髪飾りは村の花「ひとつばな」村章をデザインしたかわいい黒い服を着て、手には村の特産品の炭を持っています。今年の三月に生まれたばかりですが南牧村のキャラクターとして村の子どもたちと同じように大きく育ってくれることを願っています。また空き家を一つでも有効利用し村の活性化に結び付けられるようこれからもメンバー一丸となり努力していきたいと思っています。

～看板設置作業員～

２４年度7～9月空家問合せ件数

電話による問合せ計２４件
（７月　２件）
（８月　１５件）
（９月　７件）
メールによる問合せ計７件
（８月　３件）
（９月　４件）
来村空家物件訪問計６件
（７月　１件）
（８月　３件）
（９月　２件）

我・想・明・村

この世界には二種類の人間しかいない。それは、南牧村に住む人間とそこ以外に住む人間だ。この南牧村に住む人々は、この村ならではの夜明けを体感している。力強い日差しに照らされた山河を脳裏に焼き付けている。そして春に芽吹く草花を愛している。

この地以外に住む人々の大多数は、その移り行く自然の殆どを知らないだろう。眼下に広がる自然、その一コマを見ただけで自然を感じたことにしてしまってはちと淋しすぎる。

この谷の風はどこまでも透明でいつまでも爽やかさを持って迎えてくれる。山の木々は色移ろい、川は飛沫をあげて流れてゆく。

時に厳しく、時に優しい南牧の自然。それは他とは違う感動と緊張を醸し出し、さらなる営みへの活力を生みだしてくれると思う。村内で積極的に活動している各団体・個人の活動を通して、この南牧の地に住み、南牧の自然を感受してくれる方がふえることを願って止まない。

自称：南牧の一村民
～匿名さんの我想明村～

「火とぼし」に参加して

群馬県庁地域政策課
過疎山振係中村健太郎さん

「大日向の火とぼし」といえば「県重要文化財にも指定されている県内でも有名な火祭りで、南牧村でお盆に行われる伝統的なお祭り」ということはだいぶ前から知っていた。一度は見に行きたいと、ここ数年思っていたが、幸いにも昨年・今年と単に見に行くだけでなくこの県内でも有名な「火とぼし」に参加させてもらえることになった。それは群馬県庁で平成23年度から開始した「集落支援隊」という事業のおかげ。この事業は集落の伝統行事や共同作業の人手不足を県が企業やボランティア団体に依頼して人的に支援するという事業。火とぼしは毎年8月14・15日のお盆時期に開催いうことで昨年話があったときに企業の協力がすぐには得られなかったため、

←裏面に続く←

冬号にも続く！協議会メンバー紹介・第三弾！

少々強面ですが決して怖い方じゃありません･･･じゃないかも･･･じゃないと思う･･･思いたい･･･。
～花忠・岩井万芳さん～

南牧村消防団に入団するために東京からやってきたらしい。
変わった人だ････。
木工房かたじ屋　佐藤従基さん

まるで魚眼レンズで撮影したかのように体型が丸く見えるのは決してカメラのせいではありません！
～国土計画社長？もといっ
国土建設社長・石井尚幸さん～

バイタリティ溢れる南牧自動車のおばちゃん！こと神戸とみ子さん
先日も･･･元気でした。脱帽。

神戸広さん
“仏の広”と称されるほど穏やかな性格ながら、強い気持ちを隠し持つナイスガイ！
なんか･･･太った？

南牧散策

小沢地区在住
佐藤　俊策氏筆

雲の形は千差万別だ。南牧の空、雲の形もいろいろである。　雲の写真を撮ることを趣味とした後輩がいる。新薬を開発するのに役にたつという。亀の甲羅に映しているのか生体機能が模様化するのか、どう結び付くのかまるでわからない。雲をつかむような話である。　「春の雲は綿の如く、夏の雲は岩の如く、秋の雲は砂の如く、冬の雲は鉛の如く」～子規～　映る季節、自然の姿を満喫しつつ十ヶ月が過ぎた。

萩原朔太郎に「月に吠える」がある。なかでも「竹」が好きだ。「光る地面に竹が生え」から「青空のもとに竹が生え」となる。力強さを覚えるが意味としては相反するものを内容とすると言う。そうゆうことなのかと頭がひなる。作者の生き様を知ることは大切であるが、それぞれが素直にその詩を味わうのもいいものだ。群馬県はすばらしい詩人を生んだと感嘆している。歴史を知ることはその地に興味が湧いてくることで楽しいものだ。最近、余地峠に至る熊倉街道を歩いた。「砥沢と潮音様」も読んでみた。高原を歩いていたときに「羊大夫」の陣屋跡とその墓地をみつけた。それから何度か出向き白地に黒字で書かれている表示を読み返しながら芭蕉の句をあてはめてみた。「国破れて山河あり　城春にして草青みたり」「夏草や兵どもが夢の跡」である。奈良時代以前からの歴史伝承である。折角なので少し詳しい記述があればとイメージを描いてみたりした。

九月初めのことである。茨城大学の先生、ＮＨＫ前橋支局員、役場の有志そして近所の皆さんとお酒を酌み交わした。話題は「中山間フォーラム」のことや住みよい村とはなど大変意義のある話しに花が咲いた。

課題が深く、複雑であればあるほど実行した結果の成果は大きい。しかし、なかなか進まないものである。「河豚は食いたし命はおしし」ということもある。しなやかな強さそして、狭い道の出口を探る。到達の出口という成果は満たされ、真に気分よくひかえて浮き立つものだ。イノベーション満載の産学官フォーラムであった。　ここのところめっきり涼しくなった。あの連日の猛暑はどこへいったのか。朝、いろいろな鳥達の元気な囀で目覚めることがあった。すがすがしく気持ちよかった。彼らも冬に向かっての準備か、それとも住みやすいところへ移動したのか、さっぱり聴こえなくなった。「囀の高まり終り静まりぬ」～虚子～　少々の淋しい思いがある。空は秋最中、涼風がやさしい。季節も時代もきちんと移行している。

～南牧村の山々～

息子が３歳の頃から家族で始めた山登り。春にはひとつばなを求め、秋には紅葉を楽しみながらの山登りが続いている。登山道をおんぶして歩いたこともあった息子が、今ではおむすびの入ったリュックを背負ってくれ、歩くのが遅い私の背中を押しながら歩いてくれる。山頂では、こんな時とばかり息子にくっついて記念写真を撮る。　だんだん体力も落ち「もう山登りなんかやめよう･･･」と毎回思う。でもまた登りたくなる、山の不思議な魅力。眼下に見える南牧村の集落、妙義山、街並みの中の県庁舎、そして遠くに望む八ヶ岳、北アルプスの山並み･･･、もう何とも言えない。雄大な景色にゾクゾクするような感動を覚える。そして山頂で食べるおむすびやカップラーメンの何とも言えないおいしさ。インスタントコーヒーが極上の味になる。　さーて、今年の秋はどの山に登ろうか。また息子はいっしょに登ってくれるだろうか？これから先も山頂での記念写真の枚数が増えることを期待して、山の木々の葉が赤や黄色に染まるのを楽しみにしている。

～寄稿・夢見るおばさん～

後日談：「結局息子は行けず主人と二人きりの登山となりました。」

秋風が吹き始めた9月。
満開のそばの花

～表面からの続き～

じゃあ直接お手伝いさせてもらいますということで役場の緑のふるさと協力隊や職員と一緒に私も参加させてもらうことになった。高崎市の中でも新興住宅団地に育った私自身、実は小さい頃からお祭りというものに参加したことがなく祭りの法被を着るのもほぼ初めての体験。　このお祭り、火を回す部分は有名だが、実は太鼓やねりがあるのはあまり知られていない。我々への支援要請はこの太鼓やねりを手伝って欲しいとのこと。実際に祭り当日行った第一印象は“とにかくカメラマンの数が多い”ということ。肉眼では輪に見えない火の回転をいかに輪に撮すかはカメラマンの腕の見せどころ。カメラマン以外にも見物客がたくさん川原に集まっている。一方、集落の人はといえば自然体。『何時頃に火を回し始めますか？』の問いにも『特に決まってねんさね～。暗くなればそのうち始まるよ。』という回答。―カメラマンや観光客目当ての祭りじゃないから―とあっさりした感じ。あくまで「集落の祭り」という意識をしっかり持っている。太鼓の手伝いも『練習しなくて大丈夫ですか？』と聞くと『まあ真似して叩いてもらえば大丈夫だよ』とのこと。昨年・今年と２回参加させてもらい集落外の人間にもかかわらず火を回す体験までさせてもらったり祭りの後の反省会までご一緒させてもらったりと温かく迎えてもらった。　伝統的なお祭りでは地元住民の参加に限定して祭りの存続に苦しむところもあると聞くが火とぼしは集落の祭りであることをしっかり守りつつ外部からの手伝いも抵抗なく受け入れる度量はすごいと思う。祭りの帰り道は住民の伝統を守る柔軟さに感心しつつ懐の深さに温かい気持ちになった。機会があればまた来年も参加させてもらいたいと思う。「集落支援隊」は来年度も継続して活動予定であり火とぼし以外でも外部のお手伝いが必要な伝統行事や共同作業が必要な集落があったらぜひ県庁地域政策課まで御連絡をおねがいします！

～編集後記～

なんもく山村ぐらし通信も５月に第１号を発刊し、今回で３号目となる。いろいろな方に原稿をお願いし通信の発行にご協力を頂いています。南牧村も普段とちょっと違った角度からみると、まだまだ「新しい発見」があると思います。この通信を読んでいる皆さん、今度は「あなたが記者」になりませんか。南牧村、まだまだ「新発見・再発見」がたくさんあると思います。次回は、２月に発行予定。南牧村の様子を皆さんに発信してみませんか。

～仏のヒロシ～

投稿記事募集！

匿名・ペンネームも可